

# 原爆文学研究会報

第四四号

原爆文学研究会 二〇一四年六月

**プロキノと原爆記録映画** 一九二九年から一九三四年まで独自の記録映画の撮影と上映を試み、戦前日本における社会矛盾を糾弾したプロキノ（日本プロレタリア映画同盟）の映画制作は現在では日本ドキュメンタリー映画史の重要な参照点となっている。昨年九月に現存するプロキノの映画作品がDVDとして牧野守監修のもと六花出版より刊行され、治安維持法による弾圧と解散から八〇年を経てプロキノの映画が広く一般に鑑賞されることとなった。

プロキノ解散後に日本の映画制作において活躍を続けた映画批評家にプロキノのリーダーであった岩崎昶がいる。岩崎は一本の原爆記録映画に深く関わった。現在では『広島・長崎における原子爆弾の影響』という題名で知られるこの映画は日本映画社の加納竜一らによって広島・長崎の原爆投下直後に撮影され岩崎も制作に参加した。だが、この映画はGHQの指示により未公開のままフィルムごと没収されることになる。岩崎らは映画の全面公開を求め、その要求は社会的運動へと発展し現在の完全版公開へとつながった。

ここで原爆投下直後の広島・長崎の撮影企画をした加納竜一がかつて映画批評家としてプロキノの活動を認識していたことと制作に岩崎昶が参加したことを考えると、『広島・長崎における原子爆弾の影響』に、世界恐慌の経済破綻による労働争議やメーデーを撮影したプロキノの機動的な撮影の再現を見ることはあまりにも飛躍した想像だろうか。もちろん岩崎が主導したプロキノの影響をこの映画に直接見出すことはできない。だが、プロレタリア文化運動崩壊後の文化映画・ニュース映画の発展と映画産業を戦時協力に接続した映画法の施行を含んで、原爆記録映画の撮影が歴史的にどうして可能であったのかを考えると、現地の

状況を撮影し自由な上映を試みたプロキノの活動がそれらに先行して存在したことは、『広島・長崎における原子爆弾の影響』の成立背景を広く問う意味で重要な意味を持つように思われるのである。（雨宮幸明）

## 第四四回 原爆文学研究会報告

二〇一四年三月一日（土）、北九州市にある西日本総合展示場新館で第四四回研究会を開催し、二八名が参加しました。

坂口博氏の研究発表に対しては、「特派員という仕事のありようはどのようなものか」、「坂井個人だけではなく当時のラジカ放送の様々な言説との絡みで見えていく必要があるのではないか」、「坂井をどのように評価し、先行する批評にどのように応答するのか」等の質疑がありました。

山本昭宏氏の研究発表に対しては、「表象の変化を被爆者団体はどのように受けとめたのか」、「ジュニア小説や純文学とどのようなつながりながら被爆





者像が造形されていくのか」、「ポピュラー文化という括り方やマンガだけを見ていくことに問題はないのか」等の質疑がありました。

また、映画「はだしのゲンが見たヒロシマ」の上映会を行いました。石田優子氏（監督）、渡部朋子氏（聞き手・企画者）、渡部久仁子氏（製作プロデューサー）、楠田剛士（司会）による対話会を行い、映画では使用しなかった場面や中沢啓治の人物像のとらえ方に関する質問などがありました。

## ◇ 研究発表 1

# 坂井米夫 『アメリカ便り』に見る 原水爆と原子——占領下NHKラジオ言説の一端

坂口博

昨年四月末、福島市での研究会に参加するため、福岡から東京へ向かう航空機上で、加納実紀代の新刊『ヒロシマとフクシマのあいだ』を読んだ。そのなかで、「ラジオでは四八年二月から「アメリカ便り」が放送」という一節に目がとまる。もちろん、ここは「アメリカ文化」電化生活というイメージが大衆的にばら撒かれた」説明で、原水爆／原子力に触れた箇所ではない。

この、NHK「アメリカ便り」は、坂井米夫（一九〇〇～七八）という佐賀市出身の国際的なジャーナリストが、ワシントンから毎週十五分番組の原稿を送ったものだ。日米開戦前から米国に滞在して、そのまま戦争終結を迎えた。この放送の一部は活字として残されている。読んだ本には、確か原水爆に関するものもあったことを、記憶していた。

ただ、一九五三年生まれの私は、当時の反響を知らない。どのような放送だったのか、その実態も掴んでいない。戦後日本へのアメリカ文化の伝播に「貢献」したとすれば、原子力関係の言説を辿り、影響の痕跡がないのか検証したい。それが、報告の動機である。

結論からいえば、ノーベル賞受賞前から、湯川秀樹「中間子」論についての高評価を、実際に米国の物理学者に取材して何度か伝えていたこと、それ以上に注目できる報道はない。畑中佳恵「メディアの「原子」」（敍説「連載」）を見れば、朝日新聞では受賞前に湯川を見出しで取り上げたことはない。しかしながら、戦争によって米国滞在の新聞記者・特派員が、誰ひとりいなくなるなか、米国の信頼できる主要メディアから、さまざまなジャンルの記事を、ピックアップしていったことは、その選別の価値判断はともかくとして、再評価してもいいだろう。残念なことに、一九四八年二月～五二年一月の放送のうち、著書として刊行されたのは五〇年二月頃までである。

## ◇ 研究発表 2

# 被爆者表象の変遷

——1950年代～1960年代のポピュラー文化をてがかりに

山本 昭宏

本報告では、以下のような過程を跡付けた。

占領下の少女小説と占領終結後の原爆被害の公開を土台に、一九五〇

年代の少女向けマンガが「薄幸の被爆者」像を構築し、それは一九六〇年代の映画やマンガにも引き継がれていった。同時に一九六〇年代には、マンガや特撮番組の作り手たちの個人的資質、六〇年代の文化の変容、日本人の核への拒否感などが複合的に作用しながら、「怒り」や「怨み」を持つ被爆者像が生まれ、それは中沢啓治の諸作品や佐々木守が脚本を書いた特撮テレビ番組に結実した。そしてそれらはプロレスマンガとホラーマンガに引き継がれていく。

しかし、その後「怒り」や「怨み」を持つ被爆者像を描く作品は減り、それらの作品も忘れ去られた。振り返ってみれば『はだしのゲン』に代表される中沢啓治の諸作品だけが屹立するようになっていた。

報告では、ポピュラー文化が「怒り」や「怨み」を持つ被爆者像を受け継がなかったことを非難したわけではない。ともすれば他者への暴力に繋がりがちでネガティブに捉えられ易い「怒り」や「怨み」を、日常の批判的実践につなげていく回路がポピュラー文化に確かに存在したことを強調したかったのである。

現在の私たちに、「怒り」や「怨み」を立脚点にして過去と現在を問いただしたり、未来を構想したりする機会はあるとどないが、例えば東日本大震災と原発災害に際して、そのような「怒り」や「怨み」は一部で生産的に発揮された。しかし、「怒り」や「怨み」を持つと、その主体自身も様々な負担を強いられる。それゆえ「怒り」や「怨み」を持続させるのは難しい。ポピュラー文化の流行と結びつきながら登場し、姿を消していった被爆者像は、「怒り」や「怨み」を持続させることの困難さを示しているかのようだ。ただし、希望もまた同じ場所にあるのではないか。

「はだしのゲンが見たヒロシマ」

上映会・対話会印象記

東村 岳史

今回の企画は「はだしのゲンが見たヒロシマ」を上映した後、映画の監督（石田優子氏）、聞き手・企画者（渡部朋子氏）、製作プロデューサー（渡部久仁子氏）のお三方を招いての対談という豪華なものだった。『はだしのゲン』というマンガからたどれば、『はだしのゲン』の作者中沢氏が語る体験とマンガに込められた意図、そしてその中沢氏の語りを映像で記録する側の思いという、三つの位相を重ね合わせることになる。

映画を見て私が第一に感じたことは、中沢氏の稀有な証言者としての資質である。石田氏が初めて中沢氏に会った際、中沢氏は一時間余り自分の体験を一気に語ったという。その滔々としたぶれない語りがある中で占める比重は高く、最初の出会いで製作者側が手応えを感じたであろうことは想像に難くない。また、映画が完成した後で、中沢氏は「君たちらしい素直な作品になったんじゃないの」という感想を述べた（渡部久仁子氏）そうだから、三層にまたがるメッセージや意図は、びつたりとまではいわれないにせよ比較的重ね合わせやすいもののように見える。

ただ、そうはいっても、媒体による表現のずれや余白などをめぐって参加者の思考が触発されるのも当然で、マンガと中沢氏の体験の違い、映像の中で流れる時間の経過、映画には組み込まれなかったエピソード等々について、出席者からは質問やコメントが出された。くわしいことは次号『原爆文学研究』に掲載される予定なのでそちらをご覧ください。ここで、ここでは企画自体の意義について一言だけ。映画自体は完成された作品だが同時に未完でもあるといった主旨のことを渡部朋子氏が述べておられたのは、「作品を発表した後生まれ出てくる議論」を楽しむ（卯城竜太「マンガの分際、アートの分際」『はだしのゲン』を読む』河出書房新社、二〇一四年）という姿勢なのだろうと思う。私自身、会の終了

後『はだしのゲン』関連書籍を参考に読み、被爆体験の表現や記録の方法を考え直し始めた。製作者のみなさんがさらなる議論や考察に開かれた機会を提供してくださったことに感謝したい。

## 「はだしのゲンが見たヒロシマ」

### 上映会・対話会印象記

### 道場 親信

「はだしのゲンが見たヒロシマ」はシゲロとトモコーポレーションの共同制作による二〇一一年の作品である。二〇〇九年から一〇年まで中沢啓治に取材を続け、中沢の語りを通じて被爆体験と「はだしのゲン」の世界を追体験する構成になっている。

中沢の被爆体験に関する語りは「完成」の域に達したもので、主要な場面や事件の記憶は寸分違わず語り出される。今回の準備のために私は『はだしのゲンはピカドンを忘れない』（岩波ブックレットNo.7、一九八二年）を読んでいったが、あまりに本で読んだとおりに語られていくのを目の当たりにして、中沢の語りの完成度を思った。

しかしそのことはドキュメンタリーを制作する側にも自覚されており、すでに形の定まった中沢の語りの閾を超える証言を引き出そうという「闘い」があったと映像終了後の対話の中で石田優子監督は語っていた。そうした「闘い」が垣間見えるのが、被爆後に中沢と母が一時身を寄せた広島市「江波」の記憶を語る場面である。作品には収録されていないが、このとき制作に協力した地元の方と中沢の間で口論があり、中沢は江波にいたら殺されていただろうとくりかえし語ったという。それは肺がんの告知と重なり、自分の生きてきた道すじをあらためて問い直す機会にもなったかもしれない。

本作は中沢とともに広島市の街を歩き、かつての家の跡、小学校と自らの熱傷を遮った校舎の塀の跡などを再訪する。まさに僥倖によってその

日生き延びた中沢のその後の生は作品や本作をはじめとするさまざまな証言の中で語られているが、「その日」「その時」をいまの広島市の街で確認していくという作業は、この街の中にも塗り込められるように潜在する被爆の記憶を顕在化させる上で有効なものであったと思う。

個人的には被爆直後のゲンが家の下敷きになった家族が生きたまま焼かれるシーンにかねてより強いインパクトを受けていた。そのシーンが実際には中沢ではなく母の体験によるものであることはすでに繰り返し語られてきたことであるが、今回の作品では、弟が頭だけはさまれて身体は道路の方を向いていたということが語られていても驚いた。漫画では建物の中に父と姉と弟が閉じ込められ、外にいるゲンとやりとりする場面になっていた。現実には弟の身体は外に出ていて動かせるのに、頭だけがどうしても引つかかっていたのだという。向きは逆だ。顔は見えなかっただろう。その光景が目につかび、助け出せなかった母の無念を思った。

小田実が阪神大震災を経験した際、自らの被災体験を「難死の思想」の展開として語ったことがある（『被災の思想 難死の思想』一九九六年）。そこでは崩れた家屋の下敷きになった家族が生きたまま焼かれる場に立ち会わざるを得なかった被災者のことが語られていた。小田はこのことを伝聞の話として語っている。そのことを読んだとき、私は「はだしのゲン」を思い出した。このような死を死に、生き残ってしまう生を生き「難死者」「難生者」（このことは震災時に小田があらたに使い始めたものである）に向けられた小田のまなざしは、父や弟が死ぬ様子を母から聞いた中沢につながっている。

かつての住居の跡を訪ねる場面でも、ここにかつて家があったというただの回想には収まらない。跡形もなくなったかつての家の跡地で、家の輪郭を思い起こしながら家族の骨を掘り出したとき、すでに一度目の想起があった。想起したとおり、骨が出てきたという。このことはすでに語られたことでもある。しかし、その掘り返すという行為を、いまは

他人の家の建っている舟入本町の一角で、地面を指さしながらふりかえるとき、そこには広島という街に塗り込められた恨みや呪いの瘴気が噴き出してくるようである。対話の中で、中沢の「怒り」が話題になった。私は、昇華される怒りもあるかもしれないが、中沢の怒りはカタルシスの得られないことのない怒り、恨みや呪いを蒸留することのできない怒りではないかと述べた。その恨みや呪いと骨がらみになった怒りに広島街の中であらためて出くわす「事件」、それがこの映像を体験することであるといえるのではないか。

## 彙報

### 第四四回 原爆文学研究会

○日時 二〇一四年三月一日(土) 一三時より

○会場 西日本総合展示場新館

○研究発表

発表1 坂井米夫『アメリカ力便り』に見る原水爆と原子

—— 占領下NHKラジオ言説の一端 坂口 博

発表2 被爆者表象の変遷——1950年代～1960

年代のポピュラー文化をてがかりに 山本 昭宏

○「はだしのゲンが見たヒロシマ」上映

○「はだしのゲンが見たヒロシマ」をめぐる対話

石田 優子、渡部朋子、渡部久仁子、楠田剛士

## 機関誌 「原爆研究文学」 第一三〇号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一三〇号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一四年

九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年九月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇

〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八一四一〇一八〇福岡市城南区七隈八一一九一一

福岡大学人文学部中野和典研究室

## 編集後記

本号では巻頭エッセイと二つの研究発表要旨に加え、映画上映会と対話会の印象記を二つ掲載しています。会員外からご寄稿いただいた道場氏にお礼申し上げます。上映会と対話会では石田優子氏、渡部朋子氏、渡部久仁子氏に大変お世話になりました。昨年九月に三氏に企画を提案したところ、快く引き受けて下さいました。当日は多数の参加者があり、企画者として会場担当者としてほっとしています。対話会の詳細については次号の「原爆文学研究」に掲載予定です。余談ですが、大村克巳『はだしのゲン』創作の真実(中央公論社、二〇一三・一一)を読んでいると、中沢啓治の妻ミサヨ氏の証言に「最後に主人の好きな河豚と蟹を食べさせてあげることができてよかった」(九三頁)とありました。研究会の懇親会で河豚を食べたことを思い出し、奇妙な偶然を感じました。次回研究会は八月二日～三日、名古屋大学で開催します。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>